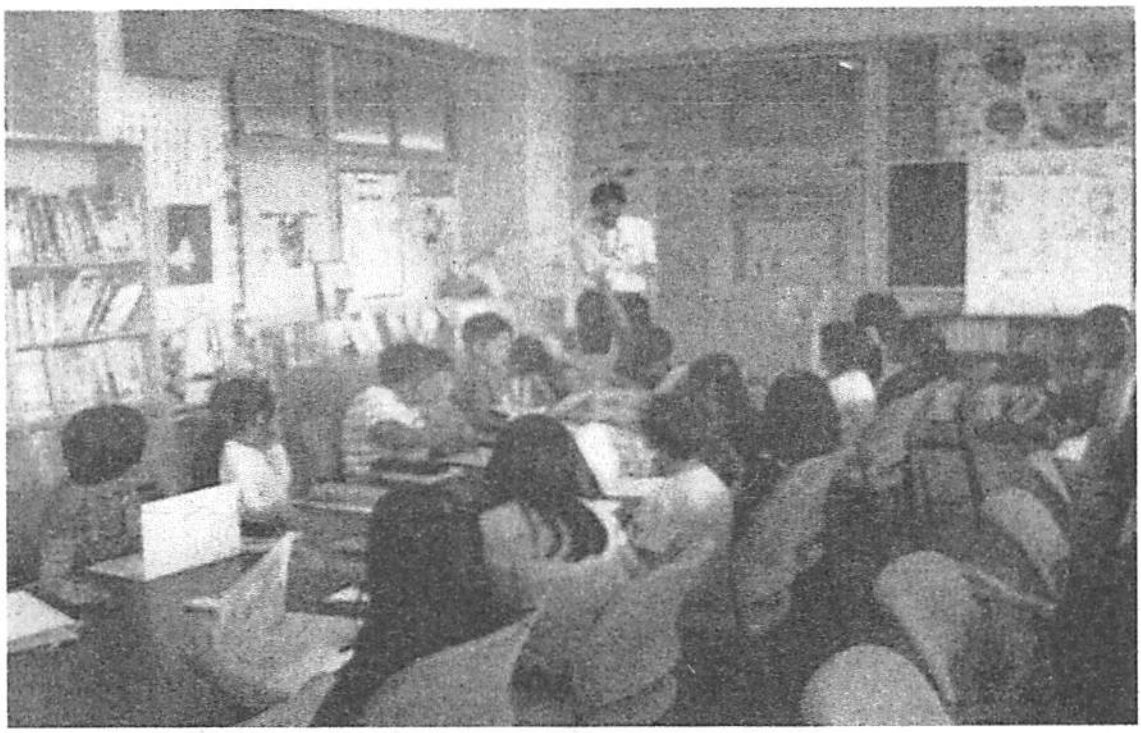
令和５年度　　第７３次印旛地区教育研究集会

学校図書館研究部　提案資料

学びをひろげる　知識を深める　心を育む　学校図書館

～学校図書館の活用につながる実践を通して～



期日：令和５年８月２２日

場所：印西市立印旛公民館

第４部会学校図書館研究部

八街市立実住小学校　　真船　貴大

≪目次≫

1　研究主題　1ページ

2　研究主題設定の理由　1ページ

3　研究仮説　3ページ

4　研究計画　3ページ

5　研究の実際

（1）仮説検証の手立て　4ページ

（2）授業実践　4ページ

（3）仮説検証実践　4ページ

（4）仮説検証の結果と考察　6ページ

6　仮説に対する成果と課題　9ページ

7　主な参考文献　１０ページ

8　資料編　１１ページ

1　研究主題

学びをひろげる　知識を深める　心を育む　学校図書館
～学校図書館の活用につながる実践を通して～

2　研究主題設定の理由

（1）学習指導要領から

令和２年度から実施された学習指導要領では、『小学校学習指導要領（平成２９年度告示）解説 国語編』の総説２（５）において「読書指導の改善・充実」と記載されている。また、「学校図書館の活用に関する事項」において、『内容の指導に当たっては、学校図書館などを目的をもって計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること。』と記載されている。この「機能」とは児童の読書活動や読書指導の場としての「読書センター」、学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、情報ニーズに対応したり、児童の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」である。本研究では児童と学校図書館とを積極的につなげることで、これらの機能をより活用できるようにしたいと考えた。

（2）学校教育目標から

夢を抱き、自ら道を拓く児童の育成
～未来へ　世界へ　共に前へ～

目指す児童の姿

①主体的に学ぶ子　②心豊かな子　③たくましく生きる子

本校の学校教育目標は、急激に変化する予測困難な時代の中で、児童が夢や目標に向かって自分自身を高め、道を切り開こうとする意欲と行動力を育てること。また、かつて八街の先人たちが森林と荒野を切り開いて一から街を作り上げた拓道精神を武器とし、予測困難な未来を生き抜く力、世界で活躍する力、周囲の人と助け合って道を拓く力を養うことができる児童の育成を目標としている。

読書活動は、児童が持つ夢や目標を達成するために知りたい情報がまとめられている本を探したり、読み進めることで自分自身がもっていなかった視点を得ることができたりする。そのため、学校図書館の活用を通して自らの学びをひろげたり、深めたりすることによって夢や目標へつながる意欲を高められると考え、研究主題を設定した。

（３）児童の実態から

本校は全校児童が６００名を超え、２６学級（うち特別支援学級７学級）という規模の小学校である。学校図書館の蔵書も学校図書館図書標準の定める冊数を十分にそろえている。休み時間に学校図書館を訪れる児童も多く、授業時間にも図書室を活用する学級がある。また、学校司書が週に１日勤務し、環境整備や学級へのオリエンテーション、蔵書の整備を行っている。図書ボランティアとして活動している保護者もおり、低学年への読み聞かせや図書室の環境整備をしている。

しかし、ここ数年間の傾向として、高学年になるにつれて年間貸出冊数が１５０冊を超える児童と、１０冊に満たない児童のように、学校図書館を利用する児童の二極化が激しくなっている。高学年になると特定の単元で学校図書館を活用するときにだけ本を借りるが、それ以外では借りないという児童が増えてくること、また読書は好きだが読みたいと思える本が図書室になく、私物の本を学校にもってきて読書をしている児童が高学年には多いこと、という２点が高学年の「学校図書館離れ」に大きく関わっていると考えられる。

学校図書館を活用する単元を増やす、などの対応をすれば改善は見込めるが、その場合児童にとっては「授業で使うから」「全員借りないといけないから」利用するようになってしまい、自ら進んで図書に関わろうとする姿とは遠いものになると考えられる。また、進んで読書活動に取り組んでいる児童の選書を制限する形で図書を貸し出す、というのも学校図書館の考え方とは異なるものである。

そのため、学校図書館を活用する単元において、普段学校図書館を利用しないような児童がもう一度学校図書館を訪れたいと思うような展開を行ったり、学校図書館の蔵書に目を向けていなかった児童に改めて本校の有する蔵書を知る機会を作ったりすることによって、これまで学校図書館から離れていた児童が学校図書館を活用し、自らの学びをひろげることができるのではないかと考え、研究主題を設定した。

本研究において「自らの学びを広げようとする」とは、児童が自らの目標や興味に合わせて、または疑問を解決するために知識を得て、活用しようとすること、と定義した。

3　研究仮説

仮説

学校図書館を活用する活動を工夫すれば、学校図書館を利活用しようとする意欲が高まり、自らの学びを広げようとするだろう。

（仮説への手立て）

・学校図書館を活用する単元展開の授業を工夫する。

・図書委員会を中心とした学校図書館の蔵書紹介を行う。

4　研究計画

年度	研究内容
令和３年度	研究主題の検討・設定（４月） 研究仮説の検討・設定（４月） 実態調査項目の検討・設定（４月） 事前実態調査実施（第４学年）（４月） 第４学年授業実践（１１月） 事後実態調査実施（第４学年）（１２月） 実態調査集計・考察（１２月）
令和４年度	実践内容の検討（４月） 事前実態調査実施（第６学年）（４月） 第６学年授業実践（１月） 事後実態調査実施（第６学年）（１月） 実態調査集計・考察（１月）
令和５年度	実践内容の検討（４月） 事前実態調査実施（第１学年）（５月） 第１学年授業実践（７月） 事後実態調査実施（第１学年）（７月） 実態調査集計・考察（７月） 研究のまとめ、提案資料作成（７月） 研究発表（８月）

5　研究の実際

（1）仮説検証の手立て

検証方法として、児童の実態を調査するためのアンケートを行う。年度初めと授業実践後とで調査と集計を行い、変容を見る。なお、１年生のみ年度初めではなく学校図書館の活用を開始した５月中旬に行った。

（2）授業実践　※詳細は資料編を参照。

○４年生　「ひみつずかん」を作ろう

「ひみつシリーズ」を取り上げ、自分が興味を持ったテーマに沿って１人１ページを作成し、１冊にまとめて「クラスのひみつ図鑑」を作成した。

○６年生　書評を書いて話し合おう

「思い出の１冊」をテーマに学校図書館の蔵書から本を選び、書評を書いてグループで紹介し合った。また、グループから代表者を１名選び、全体へ向けて紹介を行った。

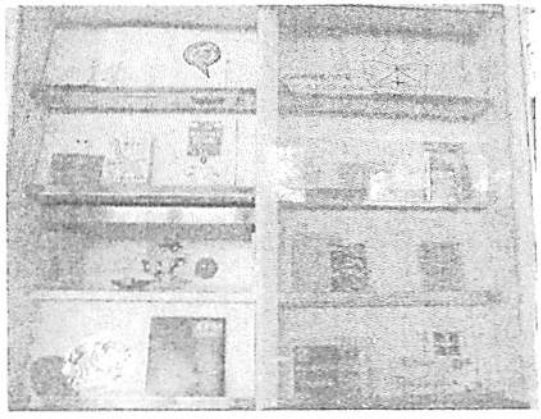
○１年生　「おんどくめいじん」になろう

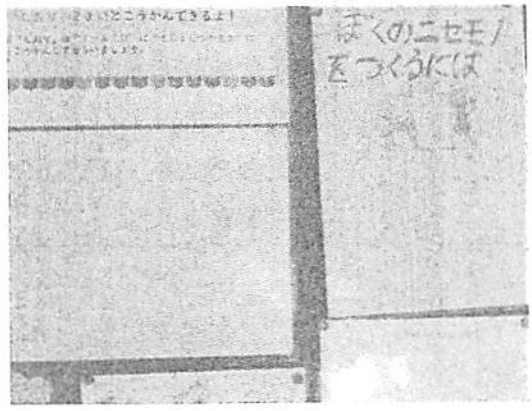
「おんどくめいじん」を目指して『おおきなかぶ』を読み進めた後、日本や世界のおはなしから自分で選んだ場面を音読発表した。

（3）仮説検証実践

① 図書委員会の児童による本の紹介

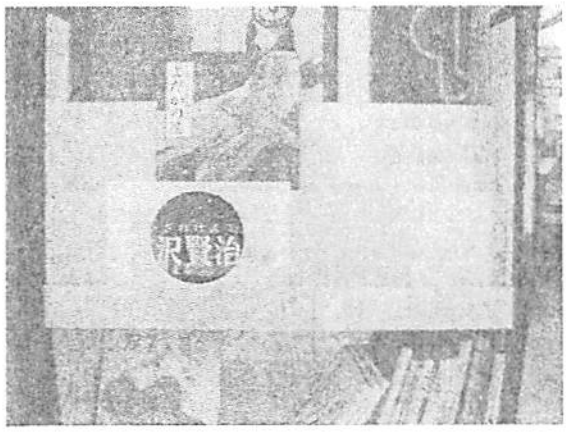
委員会活動の際に本を選び、学校図書館の廊下にあるスペースに展示ゾーンを設置して本の紹介を行った。本を置くだけでなく、紹介ポスターを作成して本がなくても内容が伝わるように工夫した。

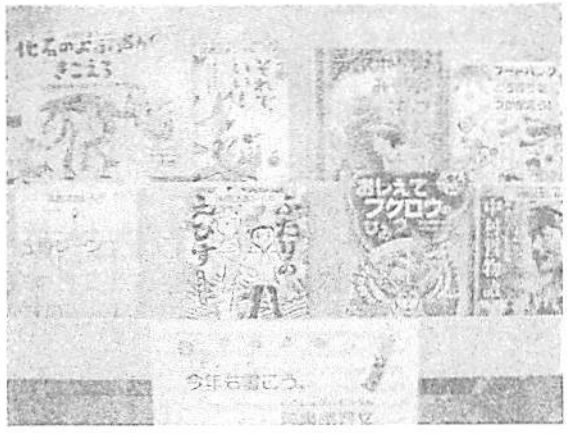




② 図書ボランティアによる本の紹介

テーマに合わせた本を選び、図書室内に特設コーナーを設置した。背表紙だけでなく、表紙が見えるように並べ、普段目につかない本にも手が伸びやすいように工夫した。





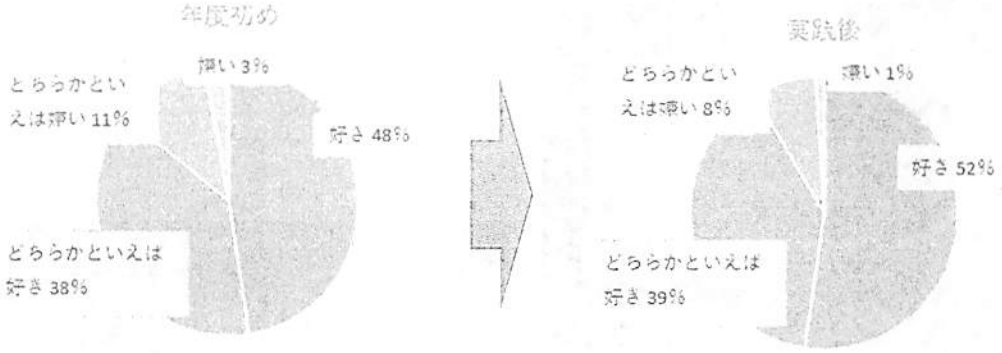
③ 新刊本棚の設置

年度内に購入した本は本来の分類番号ではなく、新刊マークを付けて専用の本棚に配架した。入口から見やすい場所に設置したり、新しい本が増えたときには目印となる掲示物で紹介したりした。

（４）仮説検証の結果と考察

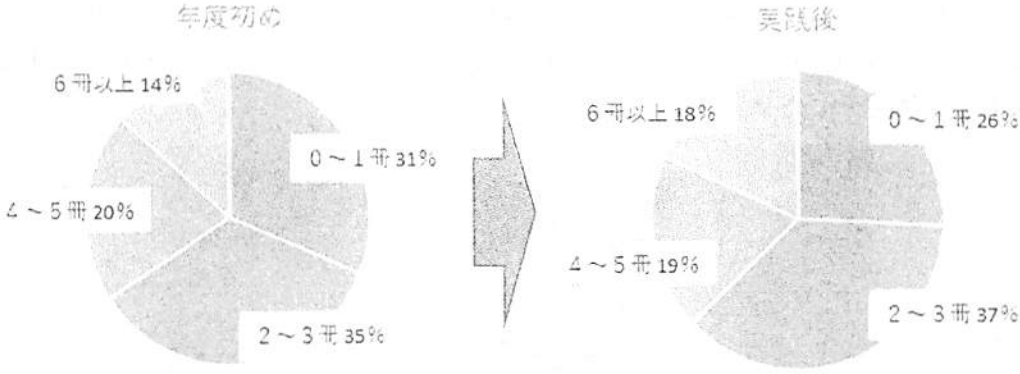
児童のアンケート結果から（年度初め・授業実践後の２回実施）

質問項目①「本を読むことは好きですか」



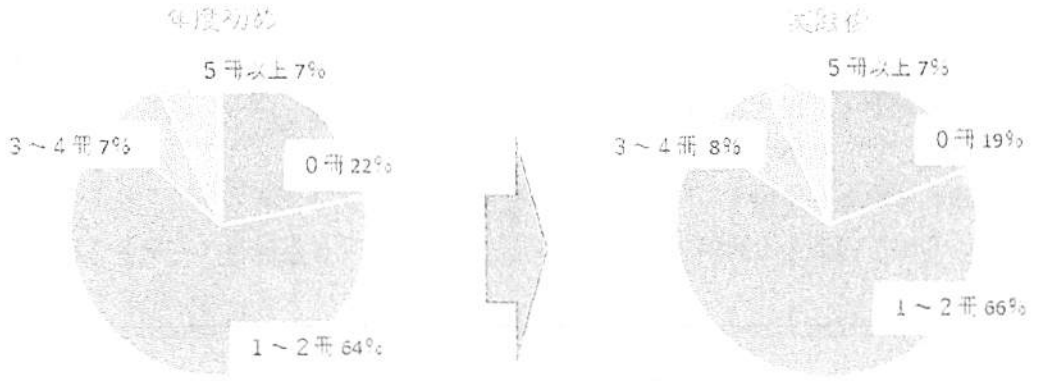
この質問に対しては「好き」「どちらかといえば好き」という好意的な回答が多く、年度初めは８６％、実践後には９１％まで増加した。特に１年生においては、実践後の調査において全員が「好き」と回答したこともあり、授業実践による効果が大きいことが分かる。

質問項目②「１週間にどれくらい本を読みますか」



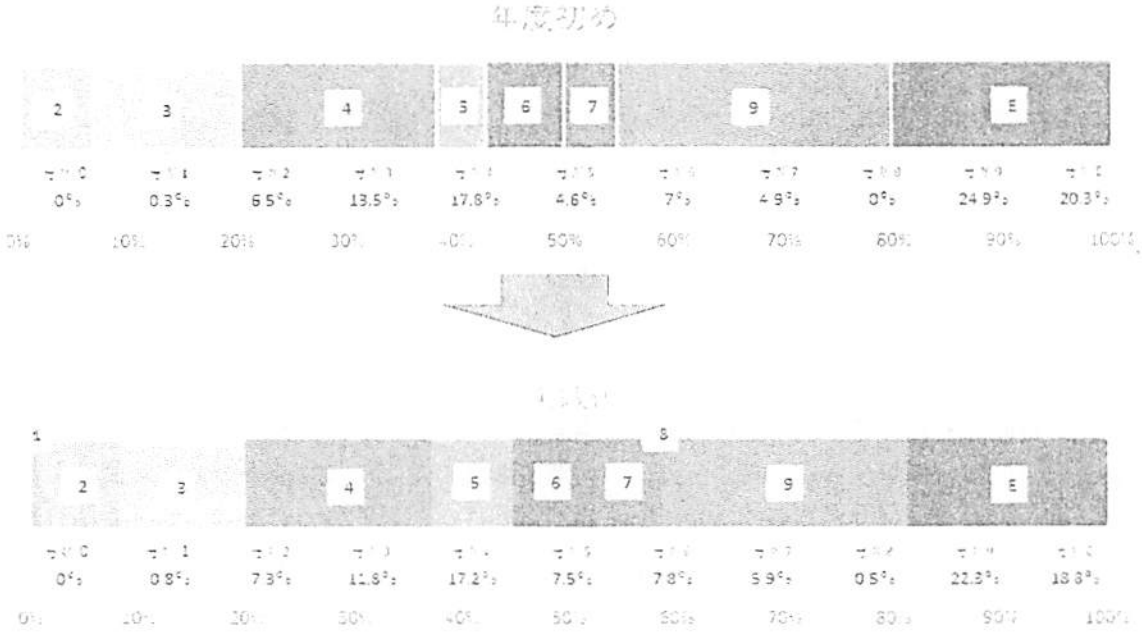
この質問は学校図書館の蔵書だけでなく、学級文庫や自宅の本も含めて回答している。年度初めと実践後を比べると、「０～１冊」と回答している割合が減少し、全体的に読む冊数が増えていることが分かる。「４～５冊」と回答した割合も微減しているが、もともと読んでいた児童がより多く読むようになった結果だと考えられる。

質問項目③「学校図書館で週に何冊くらい本を借りますか」



この質問においては、年度初めと実践後との変容があまり見られなかった。もともと１年生は図書室で週に１回本を借りるという状況であることと、４、６年生も休み時間の過ごし方が大きく変化するほどではなかったことが原因だと考えられる。

質問項目④「学校図書館でよく借りる本はどんなものが多いですか」（複数回答）



※小数点第二位で四捨五入を行ったため、合計が１００％になっていない。

分類について

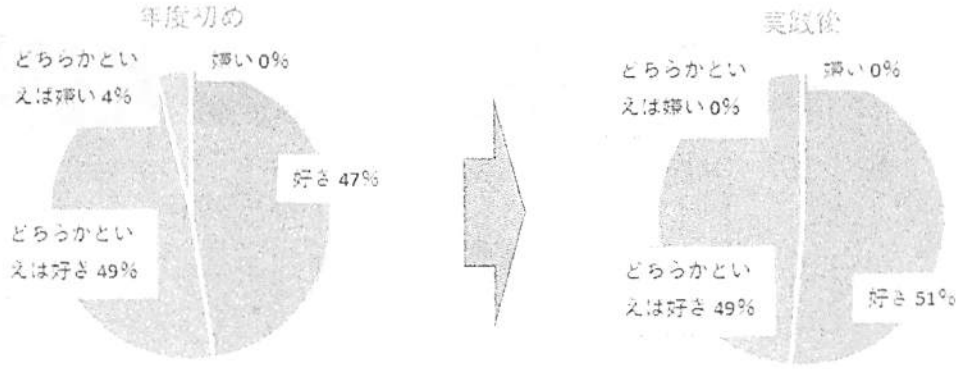
分類０：総記	分類１：哲学	分類２：歴史	分類３：社会科学
分類４：自然科学	分類５：技術・工学・工業	分類６：産業	分類７：芸術・美術
分類８：言語	分類９：文学	分類Ｅ：絵本	

本来であれば絵本も分類９に含めるべきであるが、本校のラベリングがこの１１種類であること、文学と絵本とで別のジャンルだと考えることもできるため、このように分けて調査を行った。

この質問においては、年度初めの調査では分類９が約２５％、分類Ｅが約２０％と非常に大きい割合を占めていたが、授業実践後ではどちらも減少している。それ以外では分類３と分類４が年度初めから授業実践後にかけて数値を落としている。このことから、授業実践において普段触れない分類の本に出会ったり、活用したりすることで、今まで手に取らなかった本が選ばれるようになったことが分かる。特に４年生においては、「ひみつシリーズ」に様々な分類の本があることで、選書の幅をひろげるきっかけになったと考えられる。

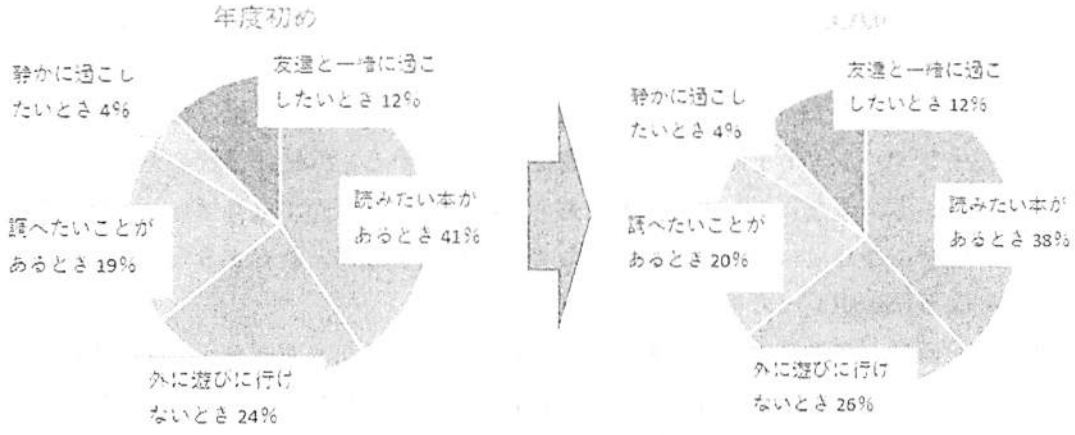
分類０の本については、もともとの蔵書数が少ないことや、普段借りている本として思い出すことができず、回答者がいなかったと考えられる。

質問項目⑤「学校図書館を使った授業は好きですか」



この質問においては、年度初めの調査のときから「好き」「どちらかといえば好き」という好意的な回答が９６％と多かったが、授業実践後の調査では全員が好意的な回答をした。理由としては「好きな本が授業中にも読める」「いつもと違って面白い」「友達の教えてくれた本がよかった」などが多く上がった。もとから学校図書館をよく利用する児童はもちろん、教室とは違う「特別感」を楽しんでいる児童も多くいることが分かる。

質問項目⑥「学校図書館をどんなときに使いたいと思いますか」（複数回答）



この質問においても、質問項目③同様に年度初めと授業実践後との調査で大きな変容は見られなかったが、最も多い回答である「読みたい（借りたい）本があるとき」の割合が減少し、「外に遊びに行けないとき」「調べたいことがあるとき」の割合が微増している。このことから、雨の日の過ごし方として学校図書館へ行くことが増えたり、興味をもったことを調べたいという意欲が高まったりしたのではないかと考えられる。

6　仮説に対する成果と課題

【成果】

○授業実践を行うことで、「本を読むことが好き」「学校図書館を使った授業が好き」と回答できる児童が増加した。普段の生活の中で学校図書館を利用していない児童が、学校図書館のよさに気付く大きなきっかけになった。

○文学や自然科学、社会科学など特定の分類の本を中心に借りていた児童が、授業実践を通して別の分類の本に触れることで選書の幅をひろげることができた。また、友達を通して知らなかった本に触れることもできた。

○授業実践を通して本に触れる機会を増やし、休み時間に学校図書館を利用する選択肢をもったり、自らの疑問を解決したりしようとする意欲をもつことができた。

以上のことから、学校図書館を活用する授業実践の取り組みを通して、児童が学校図書館や本のよさに気付き、自らにあった活用へとつなげることができたと考える。これは研究主題である「学びをひろげる　知識を深める　心を育む　学校図書館　～学校図書館の活用につながる実践を通して～」につながるものであり、本仮説は有効であったと考えられる。

【課題】

●高学年ではこれまでの読書活動における差が顕著で、選書をしたり、紹介文を書いたり

する場面で児童によってかかる時間が大きく違った。本を読むこと自体に苦手意識をもつ児童への手立てを事前に用意するなど、学校図書館を活用する前の段階として解消するべき部分だった。

●児童にタブレット端末が配当されていることもあり、児童にとっては「なにかを調べる」＝「インターネットを使う」という意識になっている。本校は学級の児童数が多く、読みたい本が重なってしまうこともあり、調べ学習においてはタブレットによる検索の方が優勢になってしまった。図書ならではの利点を児童と共有するなど、より明確な「学校図書館活用」への手立てが必要だと感じた。

●年度初めと授業実践後とで変容があまりない質問項目が２つもあった。今回の実践では授業を行った学年のみ調査を行ったため、質問内容を変更したり、全学年で実施したりするなど別の方法で調査をする必要がある。

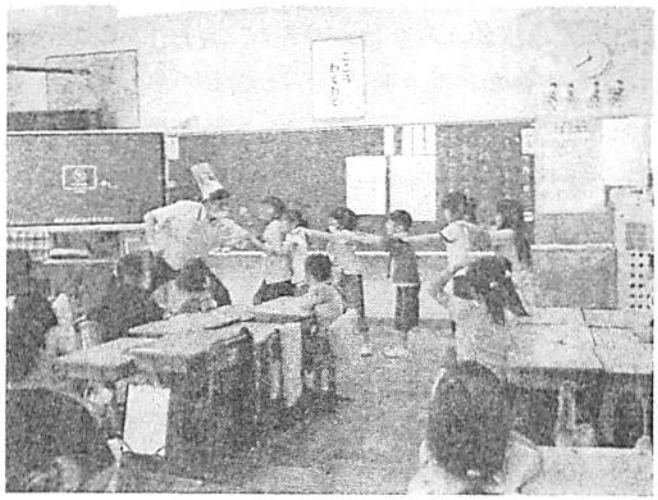
7　主な参考文献

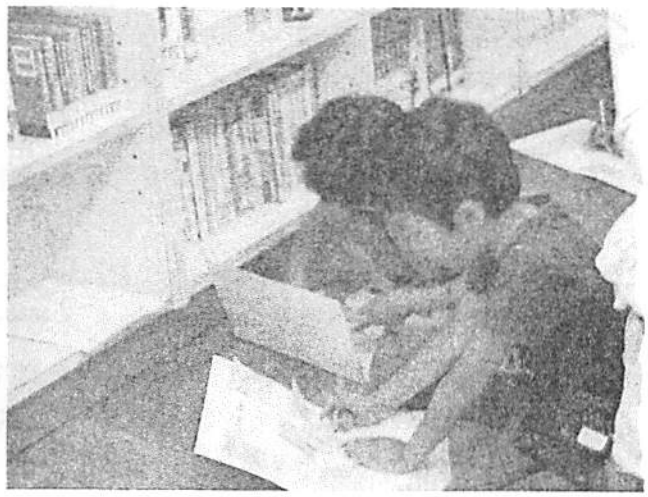
・文部科学省「小学校指導要領（平成２９年度告示）解説　国語編」　東洋館出版社 2018

・千葉県子どもの読書活動推進計画（第４次）　千葉県教育委員会　2020

・子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究～「読書離れ」の実態と、「読書好き」を育てるヒント～　独立行政法人国立青少年教育振興機構　青少年教育研究センター 2021

資料編





第４学年３組　国語科学習指導案

指導者

1　単元名　「ひみつずかん」を作ろう

2　単元の目標

・幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くことができる。
（知識及び技能）（３）オ

・相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすることができる。
（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（１）ア

・間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えることができる。（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（１）エ

・言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、自分の思いや考えを伝え合おうとする。（学びに向かう力、人間性等）

3　本単元における言語活動

調べたことをまとめ、事実やそれを基に考えたことを使って図鑑を作る。
（関連：（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（２）ア）

4　単元について

（１）単元観

本単元は、上記単元の目標を踏まえ、興味をもって調べたことをまとめ、事実やそれを基に考えたことを使って図鑑を作るという言語活動を設定した。児童はこれまでに、自分で選んだ乗り物や生き物について図書を活用して調べ、説明したりクイズにしたりする活動に取り組んできた。また、３年生では『「生き物ブック」をつくろう』の学習で、テーマに沿った複数の生き物について図書やインターネットを活用して調べ、それぞれの特徴をまとめて一冊の本を作る活動を行っている。このような活動を通して、児童は自らの興味関心に合わせて図書を活用し、知りたいことを調べるという活動に親しんでいる。

本単元では、自らが興味を持ったことに対して調べたことをまとめる際に、読む相手が興味をもてるように図表や絵を加えたり、文章を工夫したりするようにする必要がある。相手意識をもつことで文章の内容がわかりやすくなるよう意識したり、題名や飾りなどレイアウトを考えたりするきっかけとなるだろう。図書だけではなくインターネットも活用することで、詳しい内容を加えたり、簡単に絵や図を入れたりすることができるようにすることで、より意欲的に取り組むことができるだろう。

（２）児童の実態　　（省略）

（３）指導観

本単元は、４年生の児童にとって「リーフレット」「新聞」に続く３回目の「書くこと」の単元であ

る。自分の経験や疑問から調べたいことを見つけて調べていくだけでなく、それをわかりやすく「図鑑」という形で表さなければならない。児童の実態でも述べたが、本学級の児童は書くことに対して苦手意識をもつ児童が比較的多く、まずはその軽減を図る必要がある。また、図書やインターネットで調べたことをそのまま書き写せばよいと思い、意味の分からない言葉でもそのまま書いてしまうこともあるため、相手意識をもって取り組む必要がある。

１つ目の手立てとして、学校図書館にある「ひみつシリーズ」を活用して単元を展開していく。「ひみつシリーズ」とは、学研から出版され、小学校の学校図書館等に無償で配布されている「学研　まんがでよくわかるシリーズ」のことである。「○○のひみつ」という題名で、様々な物事について漫画を読み進めながら詳しく知ることができる。多くの文章の中から自分の必要な情報を見つけるという活動は、普段から読書に親しんでいる児童とそうでない児童とで大きな差ができてしまう。しかし、「ひみつシリーズ」は漫画であり、本を読みなれていない児童でも読み進めやすく、また章ごとに内容が進んでいくため、必要な部分がまとめられていて見つけやすい。読者に対する説明も多く、図鑑に書き直す際に書き方の参考としても活用できると考えられる。さらに数多くのシリーズが出ているため、普段手に取らないようなジャンルの内容に触れるきっかけにもしていきたい。そのため、本単元は教科書では「不思議ずかん」を作ることになっているが、「ひみつシリーズ」の活用に合わせて「ひみつずかん」と名称を変えて展開していく。

２つ目の手立てとして、図鑑を作成するときにはペアやグループで読み合う時間を設定する。自分だけでは気付けない部分を読み合うことで見つけたり、読みにくい表現を教え合ったりすることが考えられる。何よりも、常に「図鑑を読む相手」がいることで「読み手がわかりやすい」かどうかという相手意識を継続しながら学習が進められるようにしていきたい。「作成→読み合い→修正→読み合い」というサイクルを作ることで、友達の図鑑のよさを見つけ、取り入れながら書き進めることができるように、全体で読み手への工夫を丁寧に共有しながら展開していきたい。

5　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付いている。 （（３）オ）	①「書くこと」において、相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり、分類したりして、伝えたいことを明確にしている。（Ｂ（１）ア） ②「書くこと」において、間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えている。（Ｂ（１）エ）	①進んで自らの選んだテーマに合う本を選び、調べたことをもとに「ひみつずかん」を作ろうとしている。 ②進んで読む人のことを考え、文章やレイアウトを工夫しようとしている。

6　指導と評価の計画　全８時間

	時配	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
一次	1	・教科書の作品例を示し、クラスで１冊の「ずかん」をつくるという見通しをもつ。 ・作品例を読み、読み手に対してどのような工夫がなされているかを見つける。 ・「ひみつシリーズ」を紹介し、どのように図鑑のページを作成していくか単元計画を立てる。		
二次	2 3	・「ひみつシリーズ」をもとに、自分が興味をもった「ひみつ」を、他の図書やインターネットも活用して調べ、「ずかんメモ」を作成する。	・様々な「ひみつ」の中から、特に自分が伝えたいことを選ぶように声かけをする。 ・図書やインターネットで調べたことだけでなく、活用した書名やホームページをメモに書いておくように伝える。	（知識・技能①）観察 ・幅広く読書に親しみ、読書が必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付いている。 （主体的①）ずかんメモ ・進んで自らの選んだテーマに合う本を選び、調べたことをもとに「ひみつずかん」を作ろうとしている。
	4	・「ずかんメモ」を整理し、自分が作る図鑑の構成を考える。 ・書き出しを考え、グループで発表し合う。	・読み手に対してどのような工夫をすればよいか振り返る。 ・友達の書き出しに対して、よいところやアドバイスを伝え合うよう声をかける。	（思・判・表②）図鑑 ・間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えている。 （主体的②）観察 ・進んで読む人のことを考え、文章やレイアウトを工夫しようとしている。
	5	・書き出しの続きから、図鑑の原稿を作成する。 ・ペアで原稿を読み合い、よいところやアドバイスを伝え合う。	・読み手に対してどのような工夫をすればよいか振り返る。 ・参考資料に調べた図書やホームページを必ず書くように伝える。	（思・判・表①）図鑑 ・相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり、分類したりして、伝えたいことを明確にしている。

	6 （本時）	・前時のアドバイスをもとに、図鑑の原稿を修正したり、書き加えたりする。 ・グループで原稿を読み合い、よいところやアドバイスを伝え合う。	・読み手に対してどのような工夫をすればよいか振り返る。 ・特に目立たせたい部分には、絵や図、表を加えたり、色や飾りを付けたりするよう声かけをする。	（思・判・表②）図鑑 ・間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えている。 （主体的②）観察・付箋 ・進んで読む人のことを考え、文章やレイアウトを工夫しようとしている。
三次	7 8	・図鑑の原稿の仕上げをする。 ・これまで読み合いをしてきたグループと違うグループを作り、「ひみつずかん」を発表し合う。 ・グループから１人を選び、全体で発表する。 ・全員のページを合わせ、「クラスのひみつずかん」を完成させる。		

7　本時の指導

（1）評価規準

・間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えている。（思考・判断・表現②）

・進んで読む人のことを考え、文章やレイアウトを工夫しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

（2）展開

時配	学習内容と学習活動	指導・支援　○評価	資料
5	【見いだす】 1　本時の学習問題を知る。	・これまでの学習を振り返り、読み手に対する工夫について確認する。	掲示物
	「ひみつずかん」をもっとよくするには、どうしたらよいだろう。		
20	【広げ深める】 2　前時に友達からもらったアドバイスや、読み手に対する工夫を確認して図鑑の原稿を作成する。	・自分の「ずかんメモ」の内容が相手に伝わるかどうか、読み直しながら書き進めるよう伝える。 ・図鑑に加える絵や図を調べるなど、必要に応じてクロームブックを活用するよう指導する。 ○間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えている。 （思・判・表）【図鑑】 ※自力で図鑑を作成したり、修正したりすることが難しい児童には、テンプレートを渡したり、教師が読み上げたことを書いたりするように声をかける。	クロームブック

10	【まとめあげる】 3　作成した原稿をグループで読み合い、よいところやアドバイスを伝え合う。	・原稿を返すときに、読み手に対する工夫ができていたらよいところとして伝えるように指導する。 ・アドバイスは次回に見直せるよう、付箋に書いて原稿へ貼るように伝える。 ○進んで読む人のことを考え、文章やレイアウトを工夫しようとしている。 （主体的）【観察・付箋】 ※アドバイスをすることが難しい児童は、よいところを伝えるだけでもよいと声をかける。	付箋
5	4　本時の学習を振り返る。	・よかったところやアドバイスについて全体で共有する。	
5	5　次時の見通しをもつ。	・次の時間は原稿を完成させ、別のグループで読み合いをすることを確認する。	

（3）板書計画

「ひみつずかん」を作ろう

学　「ひみつずかん」をもっとよくするには、どうしたらよいだろう。

☆読む人のための工夫

・ていねいに字を書く。

・大きさを考える。
　目立たせたいところは大きく、
　色をつける。

・図や絵を入れる。

・よびかけの言葉を使う。

・わかりやすい言葉を使う。

【成果】

○漫画である「ひみつシリーズ」を活用することで、本で調べたり、書いたりすることに苦手意識を持つ児童も意欲的に調べ学習を行うことができた。

○どうすれば読む人にわかりやすくなるか、と何度も振り返りをすることで、児童の中に読み手への相手意識が定着し、単元の最後まで継続することができた。

【課題】

●図書やインターネットの引用と自分の考えを混ぜてしまう児童が多く、引用の仕方については今後も指導していく必要がある。

●調べたことを紙に書き表す、という活動自体が苦手な児童は一定数いるため、訂正のしやすさなども考えるとタブレットによる図鑑の作成にしてもよかった。

●調べたいテーマが重なったり、インターネットで調べたいという意識が強かったりして、「ひみつシリーズ」をうまく活用できなかった児童もいたため、テーマ選びや図書の活用方法についてはもう少し考えた方がよかった。

第６学年３組　国語科学習指導案

指導者

1　単元名　書評を書いて話し合おう

2　単元の目標

・日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができる。

（知識及び技能）（３）オ

・筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができる。

（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（１）イ

・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる。

（思考力、判断力、表現力等）Ｃ（１）カ

・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする。（学びに向かう力、人間性等）

3　本単元における言語活動

自分で選んだ本をもとに書評を作成し、内容を説明したり、考えたことを伝え合ったりする。

（関連：（思考力、判断力、表現力等）Ｃ（２）イ）

4　単元について

（１）単元観

本単元は、上記単元の目標を踏まえ、自分で選んだ本をもとに、内容を説明したり、考えたことを伝え合ったりするという言語活動を設定した。児童はこれまでに、テーマに沿って本を選んだり、自分の読書経験をもとに本を紹介したりする活動に取り組んできた。５年生ではただ紹介するのではなく、選んだ本の帯やポップを作成し、より多くの人に本を紹介する活動に取り組んでいる。

本単元は選んだ本の「書評」を作成し、それをもとに友達に本の紹介をするという、小学校国語科の学習における交流読書におけるまとめの位置付けとされている。「書評」とは、教科書本文中には『書評とは、本や作品を他の読者にしょうかいするための文章だよ。』とあり、辞書には『本の内容や、でき具合についての批評。また、その文章。』（チャレンジ小学国語辞典 第五版　Benesse）とある。児童にとっては聞きなれない単語であり、また本の「感想文」にならないように留意する必要がある。

書評を書くには本の要旨や内容を正しく捉え、読み手に分かりやすく書き表す必要がある。相手意識をもって書くだけでなく、読み手が「この本を読んでみたい」と思わせる文章にしていかなければならない。また、お互いの書評をもとに話し合うことでこれまで知らなかった本に興味をもち、「友達が読んでいた本」として手を伸ばすきっかけにもなる単元である。

（２）児童の実態　　（省略）

（３）指導観

実態にもある通り、本学級の児童の読書傾向としては二極化が進んでおり、毎年１００冊以上借りる児童と、授業で借りるとき以外全く借りないという児童とが在籍している。また、学級全体としても貸

し出し冊数を他のクラスと比較するとやや少ない。そのため、書評を書くという活動に取り組む際には選書の段階から差ができてしまうことが考えられる。また、書くことを苦手としている児童の割合も多く、苦手意識を軽減しながら学習を進めていく必要がある。読書活動そのものは好意的にとらえている児童は多いため、導入で興味を惹き、それを継続することができれば最後まで意欲的に活動することができるだろう。

１つ目の手立てとして、書評を書くために本を読みこむ時間を確保するため、冬休みを活用する。本校では長期休みの際に学校図書館で借りた本を自宅に持ち帰ることができるため、そのうちの１冊を書評で書くための図書とする。また、テーマを「思い出の本」として、低学年のときに好きだった絵本などページの少ない本も選びやすくすることで児童の負担を軽減していきたい。

２つ目の手立てとして、教科書の作品例を参考に「あらすじ」「読んで感じたこと」「読み手へのメッセージ」という構成のテンプレートを使用する。何を書くかを明示することで、どのように書いたらよいかわからないという児童が感じやすい不安を軽減していく。またどのように書評が構成されているかを知ることもできるため、テンプレートを使用しない児童も構成を確認できるだろう。

３つ目の手立てとして、書評をクロームブックで作成し、単元の最後にナンバーワンを決める、というゴールを設定する。クロームブックで作成することで修正しやすく、児童にとっては苦手意識の軽減になる。また、完成したら終わりにするのではなく、よりよい書評とするためにどうするかを考え続けることで、最後まで意欲を継続して取り組めるようにしていきたい。

5　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付いている。 （（３）オ）	①「書くこと」において、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている。　（Ｂ（１）イ） ②「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。　（Ｃ（１）カ）	①進んで読書をしたり、自分の感じた思いや考えを伝え合おうとしたりしている。

6　指導と評価の計画　全５時間

	時配	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
一次	1	・教科書の作品例を示し、「思い出の１冊」をテーマに書評を書く見通しをもつ。 ・作品例を読み、どのような構成で書評が書かれているかを確認する。 ・単元の最後にナンバーワンを決めるという単元計画を立てる。		
二次	2 3	・書評の構成を確認しながら、選んだ本の書評を書く。 ・「読んだ人がその本を読みたくなる」書評になるように読み返し、修正する。		

三次	4（本時）	・グループでだれが作ったかを隠して読み合い、投票をする。 ・グループ代表が決まったら、だれが書いたかを確認しながらよかったところを話し合う。	・どうしてその作品に投票したのか、理由を考えてから投票するように声をかける。 ・クロームブックのジャムボードを活用して、よいところを付箋で貼れるようにする。	（思・表・判②） 観察・ジャムボード ・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。 （主体的①） 観察・ジャムボード ・進んで読書をしたり、自分の感じた思いや考えを伝え合おうとしたりしている。
	5	・前時でグループ代表になった児童の作品を全員で読み合い、投票をする。 ・ナンバーワンが決まったら、それぞれの作品についてどこがよかったかを発表する。	・どうしてその作品に投票したのか、理由を考えてから投票するように声をかける。 ・クロームブックのジャムボードを活用して、よいところを付箋で貼れるようにする。	（思・表・判②） 観察・ジャムボード ・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。 （主体的①） 観察・ジャムボード ・進んで読書をしたり、自分の感じた思いや考えを伝え合おうとしたりしている。

7　本時の指導

（1）評価規準

・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。

（思考・判断・表現②）

・進んで読書をしたり、自分の感じた思いや考えを伝え合おうとしたりしている。

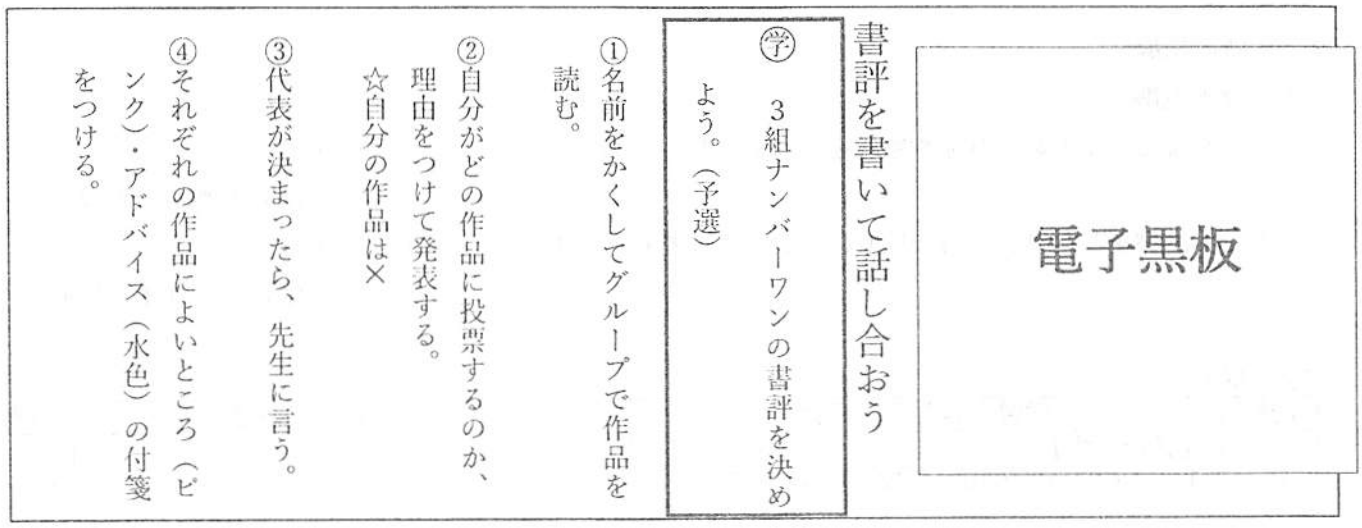
（主体的に学習に取り組む態度）

（2）展開

時配	学習内容と学習活動	指導・支援　○評価	資料
5	【見いだす】 1　本時の学習問題と学習の流れを知る。 3組ナンバーワンの書評を決めよう。（予選）		掲示物

7	【広げ深める】 2　グループごとに集まり、誰が作ったかを隠して作品を読み合う。	・どうしてその作品に投票したのか、理由を言えるようにしておくよう声をかける。	ロムッ クーブク
6	3　自分がどの作品に投票するのか、理由も加えて発表してグループ代表を決める。	・投票しなかった作品のよいところも見つけ、ジャムボードにピンクの付箋で書いておくように伝える。 ○文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げようとしている。 （思・判・表）【観察・ジャムボード】 ※理由を言うことが難しい児童はジャンボードの付箋を使ったり、考え付かない児童は文章の表現から気に入ったものを選んだりするように声をかける。	
12	【まとめあげる】 4　グループでそれぞれ誰が書いた作品かを確認し、よいところやアドバイスを伝え合う。	・アドバイスは水色の付箋を使い、よいところと見分けがつけられるよう伝える。 ○進んで読書をしたり、自分の感じた思いや考えを伝え合おうとしたりしている。 （主体的）【観察・ジャムボード】 ※アドバイスをすることが難しい児童は、よいところを伝えるだけでもよいと声をかける。	
10	5　本時の学習を振り返る。	・電子黒板にジャムボードを写し、よかった書き方やアドバイスについて全体で共有する。	電子黒板
5	6　次時の見通しをもつ。	・次の時間は決勝戦であり、全員で投票することを伝える。	

（3）板書計画



【成果】

○クロームブックを活用し、書き直しやすいこともあって児童の意欲は最後まで継続した。また、名前を隠して投票する試みにも意欲的で、何度も書き直したり、文字の大きさを工夫したりしていた。

○「友達の本が面白そうだった」という振り返りが多く出て、児童が新たな本と出会うきっかけになったことが分かった。

【課題】

●書くことが苦手な児童は書評を完成させるのが精一杯で、さらに工夫を加えるというのは難しかった。今回は教科書に合わせて書評を書いたが、他の方法も考えてみたい。

●６年生の１月という時期もあり、実践からさらに学校図書館につなげる時間が取れなかった。小学校だけで終わるのではなく、中学校の学校図書館ともつながる学習にしてもよかったのではないか。

●冬休み中に持ち帰っても自宅で読み込んだ児童は少なく、１月になってから朝読書の時間を活用して読み直した。読書時間を学習のなかで確保する必要があった。

第１学年１組　国語科学習指導案

指導者

１　単元名　おんどくめいじんに なろう

２　単元の目標

・語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することができる。　（知識及び技能）（１）ク

・場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができる。

（思考力、判断力、表現力等）Ｃ（１）イ

・進んで場面の様子や登場人物の行動を捉えて伝えようとしたり、内容を音読したりしようとする。

（学びに向かう力、人間性等）

３　本単元における言語活動

物語を読んで内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする。

（関連：（思考力、判断力、表現力等）Ｃ（２）イ）

４　単元について

（１）単元観

本単元は、上記単元の目標を踏まえ、物語を読んで内容や感想を伝え合ったり、演じたりする言語活動を設定した。ここでは、内容を相手にはっきり伝えるために何度も声に出して読んだり、登場人物の行動を読み取るために動作化を行ったりしていく。

本単元の主な教材となる「おおきな かぶ」は、児童がこれまでに学習してきた「くまさんとありさんのごあいさつ」、「けむりのきしゃ」といった物語と比べると、少し長くなっている。しかし、同じ言葉が繰り返されたり、似たような場面がリズムよく進んだりするなど、児童が「次こそ抜けるだろう」と興味をもって読み進めることができるようになっている。繰り返しの表現や増えていく登場人物などを音読し、動作化することを通して登場人物との一体感が味わえる物語であるため、楽しんで取り組むことができるだろう。

（２）児童の実態　　（省略）

（３）指導観

本単元は、児童にとって初めてとなる本格的な「読むこと」の教材を扱う単元である。長い物語を読むのはもちろんのこと、場面ごとの様子や登場人物の気持ちを、限られた挿絵や本文から読み取る必要がある。そのためには、物語を正しく読んで場面の変化を捉えられなければならない。だからこそ、声に出して音読をすることによって、目と耳の両方で内容理解の補助ができるようにした方がよいと考える。

また、本教材の特徴として「くり返しの表現」がある。かぶを引っ張る時のかけ声や、引っ張っている様子、助けを呼ぶ流れなどがくり返されているのだが、それぞれの場面でどのような違いがあるかを考えず、同じように音読していては、物語の内容を正しく捉えることは難しいと考える。そのため、くり返し音読を行うことで正しく読む練習をするとともに、同じ台詞でも発している人数や込められた

気持ちが違うことを知ったうえで音読ができるようにしていきたい。

まず１つ目の手立てとして、「おんどくめいじん」になる、という学習計画を児童と一緒に立てていく。児童だけで音読した後に「おんどくめいじん」である教師の範読を聞くことで、自分たちも名人になるためにはどうすればよいか、を考えて学習に取り組めるようにしたい。

２つ目の手立てとして、教科書の挿絵を電子黒板に拡大して映し、視覚的に場面の様子を捉えることができるようにする。どのような場面であるかを児童が理解した上で、音読の工夫につなげることができるようにしたい。さらに、より場面の様子がわかるように動作化も加えるようにしていく。特に「だれが」「だれを」引っ張っているのか、繰り返される場面の中で児童はわからなくなっていくことが予想される。登場人物を割り当て、実際に友達同士で動作を行うことによって場面の理解を深め、登場人物と一体化するようにして気持ちが想像できるようにしたい。

３つ目の手立てとして、クロームブックの撮影機能を用いて音読や動作化の様子を動画として記録することで、振り返りに活用していく。初めて児童だけで音読するときの様子を記録し、学習を進めていった時と比べることで自分たちの変化を客観視できるようにする。どのような音読や動作化をすると友達に内容がわかりやすくなるかを実感できるようにしたい。そのため、ただ見直すだけでなく、普段の音読の宿題でも示している「大きく」「はっきり」「丁度よい速さ」「気持ちを伝える」という音読の視点を「おんどくのわざ」として児童と一緒に考え、どこに注目して振り返るのかを共有して学習を進めたい。このとき、「大きく」「はっきり」「丁度よい速さ」を「きほんわざ」として位置付け、さらなる「すごわざ」として「気持ちを伝える」ためのわざを見つけるようにしていきたい。また、意識して読むことができた児童が音読している様子を記録し、「自分ももっと上手に読めるようになりたい」と他の児童が思えるようにしたい。

そして、単元のまとめとして自分で選んだ場面や、絵本を音読したり、演じたりする展開を設定する。「おんどくめいじん」になるという明確な見通しをもつことで、「おおきなかぶ」を通して音読の技能を身に付け、自分で選んだ絵本や場面で工夫を加えた音読の発表ができるようにしたい。

5　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①語のまとまりや言葉の響きやリズムに気を付けて、音読している。 （（１）ク）	①「読むこと」において、場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、発表したり、ワークシートに表したりしている。 （C（１）イ）	①進んで、場面の様子や登場人物の気持ち、物語の感想などを伝えようとしたり、内容を音読したりしようとしている。

6　指導と評価の計画　全９時間

	時配	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
一次	1	・教科書の挿絵を見ながら、お話の題名を発表したり、あらすじを話したりする。 ・「おんどくめいじん」を目指し、『おおきなかぶ』で練習しながら「おんどくのわざ」を見つけていくことを知る。		
二次	2	・『おおきな かぶ』という題名から考えられることや、初発の感想を話し合う。	・印象に残る部分の理由も合わせて発表できるように声かけをする。	（主体的①）観察・発言 ・自分の考えや物語の感想を、進んで友達に話したり、発表したりしようとしている。
	3	・第３場面まで読み、できたかぶの様子やおじいさんの気持ちを想像する。	・挿絵の様子から、どのような気持ちで音読すればよいか、それを伝えられるかを考えられるようにする。	（思・判・表①） ワークシート・発表 ・場面の様子や登場人物の気持ちを捉え、想像している。
	4	・第４、５場面を読み、おばあさんやまごが加わってかぶをひっぱったときの様子や、登場人物の気持ちを想像する。	・挿絵の様子から、どのような気持ちで音読すればよいか、それを伝えられるかを考えられるようにする。	（思・判・表①） ワークシート・発表 ・場面の様子や登場人物の気持ちを捉え、想像している。
	5	・第６、７、８場面を読み、いぬやねこ、ねずみが加わってかぶをひっぱったときの様子や、登場人物の気持ちを想像する。	・挿絵の様子から、どのような気持ちで音読すればよいか、それを伝えられるかを考えられるようにする。	（思・判・表①） ワークシート・発表 ・場面の様子や登場人物の気持ちを捉え、想像している。
	6（本時）	・物語全体を読み、工夫して読む部分や気に入った表現のある場面を発表し合う。	・これまでの音読の様子を録画で振り返り、どのような工夫があるかを確認する。	（知・技①）観察・発表 ・語のまとまりや言葉の響きに気を付けたり、場面の様子に合わせて音読している。
三次	7 8 9	・教科書の挿絵から気に入った絵本を選び、音読や演技をする。 ・友達の音読を聞いたり、演技を見たりして、思ったことを発表する。		

7　本時の指導

（1）評価規準

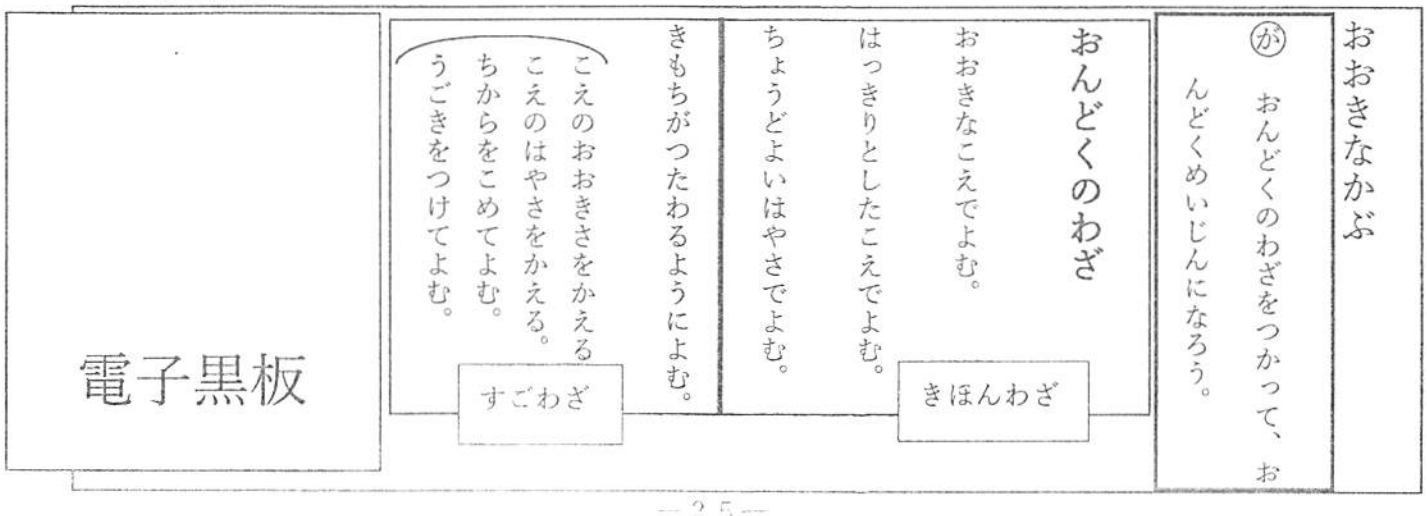
・語のまとまりや言葉の響きに気を付けたり、場面の様子に合わせたりして音読している。

（知識・技能①）

（2）展開

時配	学習内容と学習活動	指導・支援　○評価	資料
5	【見いだす】 1　本時の学習問題を知る。	・これまでの学習を振り返って登場人物の気持ちを押さえ、音読のポイントを確認する。	電子黒板
	おんどくのわざをつかって、おんどくめいじんになろう。		
5	【広げ深める】 2　これまでの音読や動作化を映像で見て、よいところを発表する。	・おんどくのわざがどこに使われているか、という視点で映像を見るように声をかける。 ・「すごわざ」を使うと、より登場人物の気持ちがわかりやすくなる、ということを確認する。	クロームブック
10	3　グループごとに地の文、人物など役割を分担し、発表の練習を行う。	・発表する場面や必要な人数を示し、すぐに練習に入れるようにする。 ○語のまとまりや言葉の響きに気を付けたり、場面の様子に合わせたりして音読している。（知・技）【観察】 ※自力での音読が難しい児童は、友達と一緒に音読をしたり、教師の後を追いかけたりするように声かけをする。	掲示物
15	【まとめあげる】 4　グループで発表し、そのグループのよいところを発表する。	・見ている人は、音読の視点を使ってよいところを見つけられるように声かけをする。 ○語のまとまりや言葉の響きに気を付けたり、場面の様子に合わせたりして音読している。（知・技）【発表】 ※自力での音読が難しい児童は、友達と一緒に音読をしたり、教師の後を追いかけたりするように声かけをする。	
5	5　本時の学習を振り返る。	・「できるようになったこと」「きづいたこと」を使って振り返ることができるようにする。	ワークシート
5	6　次時の見通しをもつ。	・次の時間からは「おおきなかぶ」の他の場面や、「おはなしのくに」で紹介されている本から発表してもよいと伝える。	絵本

（3）板書計画



【成果】

○導入で学校図書館を活用したり、平行して読み聞かせをしたりしたことで、児童の学校図書館を利活用したい意欲が高まった。

○知っているお話を「おんどくのわざ」で上手に読みたいと振り返りに書く児童も出てくるなど、『おおきな かぶ』からさらにつなげていこうとする児童の姿が見られた。

【課題】

●気持ちの読み取りと音読とで展開の軸が分かれてしまい、音読の練習回数が少なくなってしまったためか、別のお話で音読したいと思う児童の数が少なかった。次のお話につなげる手立てが必要だった。

●まだ休み時間に自分たちで学校図書館にいくことをしていないこともあり、１年生の１学期に「学びをひろげる」姿を見とることは難しい。